

## 会話における文の接続の分類

著者	市岡 香代
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 10: 27-39(1999)
発行年月日	1999-10-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10091/00022424">http://hdl.handle.net/10091/00022424</a>

# 会話における文の接続の分類

市岡 香代

## 1. はじめに

会話における文の接続関係を類型化するために、西田(1986)の先行文の後続文規制力という観点で分類を試みた。そして、先行文が後続文規制力を持つか・持たないかによって文の接続関係を「文の組み合わせ型」と「文の積み重ね型」に分類した。

本論では、この「文の組み合わせ型」と「文の積み重ね型」を話者が異なる場合と同一話者の発する二文の場合に分けて用例を見ていきたい。

これまで、文の接続の研究は、文字言語による談話（文章）を対象として、その全体構造を知るために行われてきた。文章では、参加者は書き手一人である。そして、一人の統一された思考方式が文脈として展開している。

これに対して、会話の場合、参加者は複数となる。複数の参加者の相互作用の結果として、一つの文脈（話題の流れ）が作られる。参加者が一人であっても、複数であっても、一つの文脈を作っていくということは変わらない。ゆえに、会話の場合でも、話題の展開の構造をとらえるために、会話における文の接続を研究していくことは意義がある。

## 2. 日本語教育における文の接続

言語による表現は、伝えるべき情報とそれを伝える文法形式の二つの側面から規制を受ける。だから、日本語教育においてもその両方に注意しなければならない。そのために、文レベルを越えた、文の接続や談話の研究は非常に重要になる。なぜならば、文レベルでは適切な文であっても、談話レベルでは不適切な文になってしまうことは非常に多いからである。つまり、情報内容と文法形式の制約は、談話レベルのほうが多くなるのである。

「昨日は熱がありました。」という文は、文レベルでは適切な文である。しかし、談話レベルに引き上げると、適切ではない場合がある。

(1) a : 昨日はどのようにして学校を休んだんですか。

b1 : 昨日は熱があったんです。

b2 : \* 昨日は熱がありました。 (作例)

この例では、理由を表す「のだ」の使い方が問題となる。b2 が不適切な文なのは、a の問いに答える文法形式が不適切だからである。(1) は単純な例ではあるが、このように文レベルではなく、発話と発話の連なりとしてでなければ、理解しにくい文法形式が多いのである。

(2) a : 一緒に食事をしませんか。

b : すみません。たった今食べたところなんです。 (作例)

このような「～た／～ている／～るところ」の練習は、学習者は文レベルでは適当な文を作ることができるが、ではいつ「～たところ」を使うのかということは、発話と発話の連なりの中でないと理解できない。

(3) 廊下に立っている学生に

a : どうして立っているんですか。

b1 : 宿題を忘れたので先生に立たされているんです。

b2 : 宿題を忘れたので先生が立たせているんです。 (作例)

使役受け身などは、発話と発話の連なりにさらに具体的な場面を与えなければ、その文法形式のもつ表現意図がはっきりしない。

そして、文法形式の適・不適よりももっと重要でかつ難しいのが、情報内容の適・不適である。これは、話題の流れと関係するので、前後の二発話だけでなく、話題の流れ全体をとらえなければ判定できないからである。

このように、文は文レベルから文の接続や談話レベルに上がるにしたがって、その文の持つ具体的で他の文とは違う意味が顕著になる。言い換えれば、その文が現れる具体的場面が示されなければ、文の意味や表現意図が学習者には分からないのである。

文の接続レベルの指導は現在も行われているが、学習者の表現・理解能力を高めるためには、つねに談話レベルを見た指導が行われるべきであろう。文の接続レベルというと、「問い－応答」のような本論での「文の組み合わせ型」を考えがちである。しかし、会話は最終的にはいろいろな発話が連なって、一つの流れを形成しているのである。学習者にとって、理解しにくいのはむしろ次に何を続けていいかわからない「文の積み重ね型」の方である。相手目当ての形式が付い

ていない文法形式をどうやって使うのか。それを理解させるためには、まず相手との一つ一つの発話の掛け合いで、何が行われているのか、何が要求されているのかを知らなければならない。そのために、まず、連なる二発話の関係を分類する必要があるのである。

### 3. 先行文の後続文規制力

会話における文の接続関係を類型化するために、本論がとる観点は、西田(1986)の「先行文の持つ後続文規制力」という観点である。西田(1986)は、文章展開における先行文から後続文への文脈の進展のなかで、先行する文の内容から、必然的に後続する文の内容や文種が規制されることを「先行文の持つ後続文規制力」とした。そして、先行文と後続文との文の接続における緊密度の度合いを分析した。

#### 先行文と後続文との文の接続における緊密度の度合い（西田（1986））

##### A 緊密度の度合いが高い

- (1) 先行文 問いかけ形式後続文——それに答える形式
- (2) 先行文 総括・要約的提示文——後続文 内容説明・箇条書的説明
  - 問題提示型                   ——その解決
  - 結論                           ——理由説明
  - 条件的表現                 ——その帰結
- (3) 先行文 叙述——後続文 その結果や影響
- (4) 先行文 叙述——後続文 その具体例・補足的な注
- (5) 先行文と後続文の内容が比較・対照される関係にある場合
- (6) 先行文と後続文の内容が逆接関係にある場合

##### B 緊密度の度合いがゆるやか

- (7) 先行文で述べたことを後続文で言い換えたり、くりかえしたりする
- (8) 先行文と後続文の内容が時間的な先後関係や空間的な位置関係

しかし、これらの緊密度の度合いによる二文の関係は、「先行文の持つ後続文規制力」だけを反映させているわけではない。

「先行文の持つ後続文規制力」とは、本来、先行文が後続する文の内容を制限するものであるのだから、先行文が発せられた時点で、後続する文の内容が決め

られている関係の場合のみに「先行文の持つ後続文規制力」が作用したと考えるべきである。

しかし、この分類では、(1) と(2) は、「先行文の持つ後続文規制力」が強いと言えるが、それ以外は、緊密度の度合いが高くても、それは後続文が発せられた後で、二文を並べ、その意味的な関係を考えたときに緊密度の度合いが高いと考えられることで、「先行文の持つ後続文規制力」が働いたために緊密度の度合いが高くなったとはいえない。すでに発せられた先行文と後続文を並べて、その意味的關係より緊密度の度合いを判断することは、「先行文の持つ後続文規制力」という概念とは別の問題として扱うべきものである。

そこで、本論では、先行文が西田(1986)の「先行文の後続文規制力」を持つか・持たないかによって、文の接続関係を分類する。

#### 4. 先行文が後続文規制力を持つ場合

##### 4. 1 「文の組み合わせ型」

まず、先行文が後続文規制力を持つ場合を考えたい。

会話における先行文の後続文規制力は、先行文が、後続文を発する話者に対して、なんらかの要求をしたときに強く働くといえる。つまり、会話において、先行文の内容が後続文の内容を規制するのは、先行文の内容が要求表現（森田（1989））の場合である。

そして、先行文が要求表現の場合、後続文規制力によって受け入れ、もしくは受け入れ拒否の表現が続くことが期待される。後続文の話者が要求を受け入れるか、拒否するかは問題ではないので、合わせて受け入れ表現とすると、「要求表現——受け入れ表現」という文の接続関係が作られるのである。

本論では、先行文が後続文規制力をもつ文の接続関係を、「文の組み合わせ型」と名付けることとする。先行文と後続文が一對になって、出現するからである。

「文の組み合わせ型」——先行文の内容が後続文の内容を規制する。  
意味的には「要求表現—情報提示（受け入れ表現）」という関係である。

「文の組み合わせ型」は、先行文が後続文規制力を持つので、先行文が発せられた時点で、後続文として決められた内容を持つ文が発せられることが期待され

ている。そしてその意味的な関係は固定したものである。

また、「文の組み合わせ型」では、文と文は一对になっているので、先行文と後続文との間で話題の進展はない。後続文で先行文の要求に答えて新しい情報が提示されたとしても、それは、新しい情報の提示にすぎず、先行文との話題が切れ、後続文から話題が進展しているという現象ではない。話題の流れのなかで、先行文と後続文は一对となってその進展に参加しているのである。

#### 4. 2 「文の組み合わせ型」の分類

「文の組み合わせ型」とは、先行文が後続文規制力を持つ関係である。先行文は、要求表現であり、その種類によって、細分化できる。

A 応答要求表現（呼びかけ）——応答表現（応答）

B 応答要求表現（あいさつ）——応答表現（あいさつ）

C 回答要求表現（問いかけ・確認）——回答表現（回答）

D 行動要求表現（誘いかけ・命令など）——応答表現（回答・応答）

なお会話での文の接続は、異なる話者の場合と同一話者の場合があるので、異なる話者の二文の接続関係と同一話者の二文の接続関係とに分けられるが、「文の組み合わせ型」は、ほとんどの場合異なる話者間での二文の接続関係である。

A 応答要求表現（呼びかけ）——応答表現（応答）

(4) 1 A モシモシ

2 B モシモシ (資料 3)

(5) 純 : 正吉。

正吉: ああ。 (北)

B 応答要求表現（あいさつ）——応答表現（あいさつ）

(6) 60A ジャアネ。

61B ホイ ジャアネ。 (資料 1)

C 回答要求表現（問いかけ・確認）——回答表現（回答）

(7) 20A ゲンキデスカ。

21C ゲンキジャナイ。 (資料 2)

(8) 50A トマツタンデシヨ↑

51B ウン。 (資料 4)

(9) 70B ドコデ ネットアノ↑

71A シタデ ネット。 (資料3)

(10) 85B アッ アメワ ドウダッタ↑

86A アメー コッチワ ソンナ ヒドクナイヨ。 (資料2)

D 行動要求表現(勧誘・依頼・命令など)——応答表現(回答・応答)

(11)79A マタ ノモウネー。

80B ノモウネー。 (資料3)

(12)113B タベモノ キヲツケナサイヨ。

114A ウン。 (資料2)

「文の組み合わせ型」は、文1と文2の話者が異なる場合が一般的で、要求表現の種類によって細分化できるが、意味的な関係は、「要求表現——情報提示(受け入れ表現)」であるといえる。

しかし、言語資料を見ていくと、先行文が要求表現であっても、後続文が受け入れ表現でない場合もある。その場合は、受け入れ表現が省略されていると考えられる。つまり、「文の組み合わせ型」で、あいさつとあいさつや呼びかけと応答という組み合わせは、もう固定化されているので、あえて、後続文で受け入れ表現を表明しなくても、会話のルールを逸脱することがないのである。

(13) 25A ナゴヤ イクノ↑

26C カイギダ。 (資料2)

(13)のように、先行文が問いかけであっても、回答表現がない場合もある。これも同様に、回答表現は省略されていると考える。

(13)' 25A ナゴヤ イクノ↑

| a

26C (ウン。)——カイギダ。——b (資料2)

これは、a「文の組み合わせ型」とb「文の積み重ね型」が複合してできた型であると考えられる。つまり、要求表現「ナゴヤ イクノ↑」と省略された回答表現「ウン。」が「文の組み合わせ型」、「ウン。」と「カイギダ。」が「文の積み重ね型」であるといえる。

## 5. 先行文が後続文規制力を持たない場合

### 5. 1 「文の積み重ね型」

先行文が後続文規制力を持つ「文の組み合わせ型」に対して、先行文が後続文規制力を持たない場合、先行文に対して、様々な内容の後続文が続くこととなる。このような文の接続関係を、「文の積み重ね型」とよぶこととする。

「文の積み重ね型」では、「文の組み合わせ型」が対をなす二文であったのに対して、文と文は対ではなくそれぞれが独立した文である。そして先行文と後続文との間で話題の進展がある。それぞれの文が話題をつないでいるのである。「文の積み重ね型」の二文の関係は、「情報提示——情報提示」・「情報提示——要求表現」の二種類に分類できる。

「情報提示——情報提示」は、先行文に続いて、後続文がさらに情報提示を提示する関係である。「情報提示——要求表現」は、先行文に続いて、何か要求を表現する関係である。

「文の積み重ね型」——先行文の内容が後続文の内容を規制しない。

意味的には「情報提示——情報提示」「情報提示——要求表現」の二種類に分類できる。

## 5. 2 情報提示——情報提示

### 5. 2. 1 異なる話者による場合

「文の積み重ね型」は文章と同様に同一話者による文の接続においては多数みられる。ところが、会話の中では、異なる話者によっても「文の積み重ね型」の文の接続が行われる。そして、特に、この「情報提示——情報提示」という関係では、異なる話者に対して、何か要求をするわけでもなく、二人で文脈を作っていくということに徹しているのである。このような型がみられることは、会話が相互作用によって協力的に作られていくことの一つの特徴であるといえる。

(14) 14A スゲー ヨカッタ

15B メチャクチャ ラブラブジャンネェー。 (資料 1)

14A と 15B はともに同一事項に対する異なる話者の感想といえる。

(15) 17B キンネン マレニミル ハッピーエンドドラマダッタヨ。

18A サイゴ スゴカッタジャン。 (資料 1)

(16) 19B オドロイチャッタ。 (資料 1)

20A ナンカ ナンカイイノ アンナンデ ッテカンジナンデスケド。



(15) (16) とも、(14)と同様である。

(17) 26A シカモ ビナン ビジョ。

27B ソウ。ホント サンジュウイチデ アレワ チョットネー。

28A ネー。サンジュウイチマデ マッテ アンナ コウフクガ ア  
ルナラ マツヨネー。 (資料1)

(17) は、間に「ソウ」とか「ネー」とかいう短い言葉が入っているが、(14)(15)(16)と同じように感想が積み重ねられている。(14)(15)(16)の後続文の冒頭に(17)と同様の「ソウ」を入れても文脈は変わらない。もちろん、「ソウ」とか「ネー」が必ず必要とされているわけではない。

では、(18)はどうだろうか。

(18) 13B ミタヨ モウ。

14A スゲー ヨカッタ (資料1)

(18) は、(14) と比べて、二発話の間で少し情報の内容が変わった感じがする。

(19) A すごい寒かった。

B 今日 テレビみたんだ。 (作例)

(19)' A すごい寒かった。

B うん。 今日 テレビみたんだ。 (作例)

(19)" A すごい寒かった。

B うん。ところで 今日 テレビみたんだ。 (作例)

(19)" がもっとも自然である。異なる話者間で情報の内容が違う発話を連ねる場合には、一度同意をして接続詞で二文の意味関係を提示することが必要になってくる。

(20) 52B メチャクチャ シンセツダヨネー Kクンツテ。

53A ウン デモ コナイダノ Iサンノ イッケンイライ。

(資料3)

(21) 32B デキアガッタモンナ アノ トキ。

33A ズ ナンカ ゼンゼン カエンナクツテ (資料3)

## 5. 2. 2 同一話者による場合

同一話者による「文の積み重ね型」の「情報提示?情報提示」は、非常に多い。話者が自分で情報を次々提示していくので、自由に話題を展開することができる。

(22) 51B アー ッテイウカ オコルッテ イウヨリ カカッテキテモ  
キツチャウ。

「ゴメン。カケナオスワ。ガチャン」テ。 (資料1)

また、このように、話者が、一人で文を積み重ねて次々に展開していくタイプ  
だけでなく、問いに答えて何か付け加えるといったタイプも多い。

(23) (36B アッ ケッキョク トマッタノ↑) - a (資料3)

37A ウン トマッタ トマッタ。 - b

デモ トマッタケド ワタシ モウ アタマ ガンガン イ  
タクッテ ゼンゼン ヤクニ タタナカッタ? c

「トマッタノ↑」と「ウン トマッタ トマッタ。」という a と b の「文の組  
み合わせ型」の後、話者Aによって b と c の「文の積み重ね型」が続いている。

同一話者による場合は、話者が一人で次々に展開できるので、聞き手を無視し  
ないために (24) のように、話者が「ネ」や「ヨ」といったことばを文末に付け  
て、聞き手のあいづちを促すといったことがよく行われる。

(24) 44B ソ Kクンガ ホント ガッコウノネ

45A ウン

46B チカクマデ オク ガッコウノ チカクト イウカ ニシモ  
ンノ チカクマデ オクッテ クレタノヨ。

### 5. 3 情報提示——要求表現

「情報提示——要求表現」は、異なる話者間で、「情報提示——情報提示」に  
比べてよく見られる。後続文が要求表現になることが多いのは、相手のことを聞  
いて、さらにもっと相手のことを聞き出そうとする話者の協力的な姿勢の表れで  
あるといえる。

(25) 63A ガー トカイツテ。 (資料3)

64B ネー ソーイエバ Mサン ズット ネットタノ↑

(26) 69A ナンデ コンナトコロデ ネットルノー トカイツテ。

70B ドコデ ネットタノ↑ (資料3)

(27) 43B ゴジグライマデ イタッテイウカ。

44A ミンナ↑ (資料1)

(25) では、Mサンについてという新しい情報を、(26) では、寝た場所という

新しい情報が、求められている。

これに対して、同一話者の場合、「情報提示——要求表現」は少ない。

(28) (6 A イチジハングライニ ナッテモヨイ↑) — a

7 B ウン。 — b

イチジハングライニ トリニクルノネ。 — c

(8 B ウン。)

(資料 5)

相手からの要求 (a) に答える情報提示 (b) をした後で、また、要求表現 (c) を続けて行うといったタイプばかりである。

この場合の要求表現は、先行文 (b) の内容に関する問いかけではなく、その前の相手からの要求 (a) に対する確認や依頼・勧誘といった要求表現が多い。

(29) (92 B イコウ。) — a

93 A イイネ。 — b

イコウネ。 — c

(94 B ネ。)

(資料 3)

## 6. おわりに

本論の分析の特徴は、文の接続関係を先行文が後続文規制力を持つか・持たないかによって「文の組み合わせ型」と「文の積み重ね型」に分類したことである。

これまでの文の接続関係の研究は、書かれた文章を対象に行われてきたため、「要求表現」がほとんどなかった。しかし会話は複数話者の交互作用として構成されているので、「要求表現」が非常に多く出てくる。よって先行文が「要求表現」の場合と「情報提示」の場合に分けることが適切だと考えたのである。前者が「文の組み合わせ型」で、後者が「文の積み重ね型」である。これまでの文章論での文の接続関係は、特殊な形式を除いては、すべて「文の積み重ね型」に属する。しかし、会話では、同じ「文の積み重ね型」であっても、相手目当ての言語形式を付加するという形で、会話特有の文の接続関係をとるのである。

発話と発話が連なって、一つの話題を持った会話を作りだしている。その会話の構造を知るためには、まず最小単位である二文の接続関係をとらなければならぬ。そのために、「要求表現」と「情報提示」を具体的に分析しさらに「要求表現」と「文の積み重ね型」に付加されている相手目当ての言語形式との違い

をはっきりさせていく必要がある。

【参考文献】

- 相原林司 (1984) 『文章表現の基礎的研究』 明治書院  
—— (1987) 「接続語句と文章の展開」 『日本語学』 第6巻第9号 明治書院  
池上嘉彦 (1975) 『意味論』 大修館書店  
—— (1982) 「テキストとテキストの構造」 『談話の研究と教育 I』 大蔵省印刷局  
市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論』 教育出版  
沖裕子 (1994) 「方言談話にみる感謝表現の成立—発話受話行為の分析—」 『日本語学』 第13巻第8号 明治書院  
国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型(1)』 秀英出版  
—— (1963) 『話しことばの文型(2)』 秀英出版  
久野曄 (1978) 『談話の文法』 大修館書店  
佐久間まゆみ (1983) 「文の接続—現代分の解釈文法と連文論—」 『日本語学』 第2巻第9号 明治書院  
—— (1987) 「段落の接続と接続語句」 『日本語学』 第6巻第9号 明治書院  
杉戸清樹・沢木幹栄(1979) 「言語行動の記述—買い物行動における話し言葉の諸側面—」 『講座言語第3巻 言語と行動』 大修館書店  
泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』 くろしお出版  
橘豊 (1987) 「「接続」研究の現在と問題点」 『日本語学』 第6巻第9号 明治書院  
田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能—」 『研究資料日本文法 4 修飾句・独立句』 明治書院  
土部弘 (1962) 「文章の展開形態」 『国語学』 第51集 国語学会  
寺村秀夫他 (1990) 『ケーススタディ 日本語の文章・談話』 おうふう  
時枝誠記 (1950) 『日本文法口語編』 岩波書店  
永野賢 (1972) 『文章論詳説』 朝倉書店  
—— (1985) 「文章における主語の連鎖」 『日本語教育』 56号 日本語教育学会  
西田直敏 (1986) 「文の接続について」 『日本語学』 第5巻第10号 明治書院

- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- Haliday, M.A.K. and Ruquiya Hasan. (1976) *Cohesion in English* London Longman.
- M.A.K.ハリデー・R.ハッサン (1991) 『機能文法のすすめ』 大修館書店
- 梶弘仁 (1985a) 「接続詞と文章の展開」 『日本語教育』 56号 日本語教育学会
- (1985b) 「主題の展開と談話分析」 『国際商科大学論叢商学部編』 第31号 国際商科大学
- 林四郎 (1973) 『文の姿勢の研究』 明治図書出版
- (1978) 『言語行動の諸相』 明治書院
- (1982) 「日本語の文の形と姿勢」 『談話の研究と教育・』 大蔵省印刷局
- ザトラウスキー, ポリー (1991) 「会話分析における「単位」について—「話段」の提案—」 『日本語学』 第10巻10号 明治書院
- (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』 くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- 牧野成一 (1991) 『くりかえしの文法』 大修館書店
- 水谷信子 (1985) 『話しことばの文法』 くろしお出版
- 森岡健二 (1973) 「文章展開と接続詞・感動詞」 『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』 明治書院
- 森田良行 (1958) 「文章論と文章法」 『国語学』 第32集 国語学会
- (1987) 「文の接続と接続語」 『日本語学』 第6巻第9号 明治書院
- (1989) 「Ⅱ連文型」 『談話の研究と教育Ⅱ』 大蔵省印刷局
- 山口仲美編 (1979) 『論集日本語論究8 文章・文体』 有精堂
- 渡辺亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』 くろしお出版

#### 【引用言語資料】

(北) 倉本聰 (1995) 『北の国から '95 秘密』 理論社

(資料1) - (資料5) 電話会話の文字化資料

この文字化資料は、平成8年6月と平成9年5月に収集した電話会話を文字化したものである。(資料1)と(資料3) - (資料5)は、電話のかけ手・受け手ともに20代の女性で、(資料2)はかけ手が20代の女性、受け手が40代の女性

である。会話の始めから、異なる話者の発話ごとに、番号をふってある。

#### 凡例

番号 その発話が、会話の始めから何番目に発せられたかを表す。

A/B 異なる話者の発話を表す。A はかけ手、B は受け手の発話である。

↑ 上昇のイントネーションが認められるところ。

。 下降のイントネーションが認められるところ。

#### 【付記】

本稿は、平成九年度信州大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文「談話における文接続の意味論的研究」の一部に、加筆修正したものである。修士論文執筆にあたっては、指導教官沖裕子先生にご指導賜りました。また、本稿作成に先立ってほぼ同じ内容を長野県ことばの会平成9年度研究発表会で発表した。席上、有益な御助言・ご指導を賜りましたことを記して感謝いたします。

(いちおか かよ・マラヤ大学予備教育課程日本留学特別コース講師)